

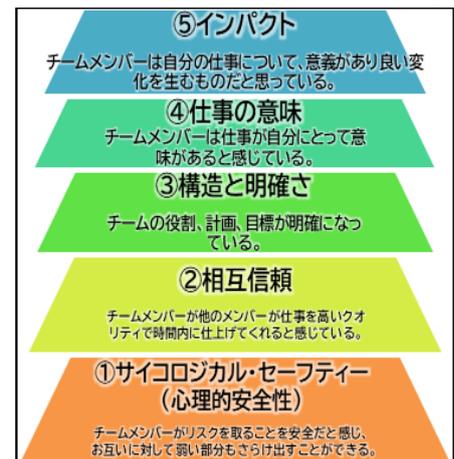
「ウェルビーイングと心理的安全性を基盤とした商業教育のカリキュラム・マネジメントの実践研究」 ～教科横断・外部連携・チームビルディングによる学力向上へのアプローチ～

愛知県立愛知商業高等学校
教諭 柘植政志

1 主題設定理由

「ウェルビーイング（心の充実感や幸福感）」は、個人の幸福にとどまらず、組織の健全性や生産性にも影響する重要な概念であり、教育やビジネスにおいては学習成果や業績向上に寄与することが指摘されている。エドモンドソン教授が提唱した「心理的安全性」は、失敗を恐れずに発言できる環境を意味し、Google 社の研究では、チームの効果性に影響する 5 因子が示され、その中でも心理的安全性が成果に直結することが明らかになった。【資料 1】これは、チーム内のウェルビーイングが成果に直結することを示唆している。

商業教育においても、チームワークやコミュニケーション能力の育成はウェルビーイングと密接に関係しており、本校では「全ての教育活動にビジネスの視点を」を掲げ、校則改革や外部連携を通じてウェルビーイング向上に取り組んできた。これらの背景を踏まえ、本研究ではカリキュラム・マネジメントの手法を用いて、教育課程の改善とウェルビーイング向上の効果的手法を検証することを目的とし、以下の仮説を設定する。



【資料 1】 チームの効果性に影響する因子

2 研究仮説

(1) 商業教育は、生徒の学習意欲と学力の向上につながる。(仮説 1)

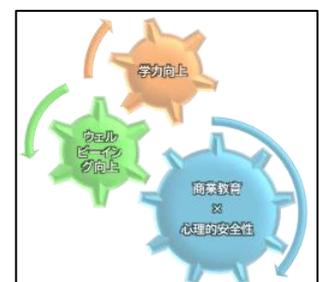
商業教育は、ビジネスを題材とした生徒にも身近な教材である。実践的な学びを提供することで、生徒が自身の役割を自覚すると共にチームワークを通じて他者へ貢献し、自身を高める役割を果たすことができる。ビジネスに触れる機会を組織的に増やすことで、学習意欲と学力の向上を目指す。

(2) 心理的安全性の確保は生徒の自己効力感を高め、ウェルビーイング向上に寄与する。(仮説 2)

心理的安全性が確保された集団では、生徒が失敗を恐れずに発言したり挑戦したりできる雰囲気を作られている。こうした環境では、生徒は自分の意見が尊重されると感じることで、自己効力感（自分にはできるという感覚）が高まる。そのため、生徒が主体的に学習に取り組めるようになり、ウェルビーイングが向上すると期待される。

(3) ウェルビーイングの向上は学力向上を後押しする。(仮説 3)

エドモンドソン教授や Google 社の研究でも、心理的安全性の高い組織は、個人が積極的に学びを深め、成果を上げる傾向があることが示されている。さらに、企業と連携したビジネスの授業では、社会で役立つ力が身につく、将来に活かせる実感を伴うことで、精神的な充足感の向上にもつながると考えられる。このことから教育においてウェルビーイングを向上させることは、学習効果を高める重要な要素となる。【資料 2】



【資料 2】 本仮説の図式

3 研究計画・研究方法

(1) カリキュラム・マネジメント手法による教育課程の内容見直し（仮説 1 に対応）

ア PDCA サイクルに基づいた教科横断的なアプローチ（全教科ビジネスに関連した授業実践）

教育課程の質的な改善を促すため、①課題研究を探究的な内容に見直すために、校内で使用している「課題研究日誌」を改善し、②全ての教科で「ビジネス」をテーマとした教科横断的な授業を計画・実施し、見える化を図る。

イ 人的・物的資源の活用（科目の学習内容を高める外部連携の充実）

多くの科目で外部講師を活用した授業を実施しているが、通年で関わる科目は課題研究が多く、他の科目では講演や見学などが中心となっていた。そこで、課題研究以外の科目でも通年関わることのできる科目を洗い出し、既存科目における外部連携の充実を目指す。

(2) 16personalities を活用したチーム作りと心理的安全性を確保するルール設定（仮説2に対応）

16personalities（16 パーソナリティ）とは、MBTI（マイヤーズ・ブリッグス・タイプ指標）に基づく性格診断法で、人間の性格を 16 種類のタイプに分類する診断法である。この診断は、個々の特性を理解しやすくし適職や人間関係の改善に役立ち、自己理解を促進するだけでなくチームアセスメントなどにも使われる。さらに、生徒間の議論を活発にするため、心理的安全性の高い環境（失敗や批判を恐れずに発言・行動できる場）の構築を目指す。

(3) ウェルビーイングと学力の相関関係の検証（仮説3に対応）

心理的安全性の高い職場では成果を上げることができるという Google 社の研究にもあるように、上記の 16 personalities や対人関係リスクを低減するルール作りにより、心理的安全性を確保し、外部連携による高度かつ適切な目標設定のビジネスを学習することで、ウェルビーイング及び学力が共に向上すると考えられる。

4 研究の実践

(1) 課題研究日誌の改善(PCDA サイクル・教科横断)

探究活動を充実させるために、従来から使用していた課題研究日誌を改善した。以前の様式から探究の過程や観点、発見した課題などの項目を追加し、探究の学びを分かりやすく整理し、評価の観点を明確にすることで、生徒の学びを見取ることができるようにした。

(2) 全教科でのビジネスを起点とした授業作り（PCDA サイクル・教科横断）

商業科では既存の科目の内容に合わせて、ビジネスを発展的に考える授業や、ケーススタディを通じたビジネスの追体験、外部連携を中心とした実学を学ぶ授業にまとめることができた。

国語科では企業による SDGs の取組をまとめさせ、意見を述べる授業や、理科では生物多様性とビジネスをテーマに授業を考案した。英語科や家庭科ではエシカルファッションをテーマにビジネスを題材としたテーマの授業を組み立てるなど工夫を行った。

数学科では管理会計の授業で使用している教材を使用し、「最適セールス・ミックスの決定」を数学的観点から考える授業を行った。生徒は普段取り組んでいる管理会計問題を異なる観点で解くことになり、狙い通り、「ビジネス」をテーマに全教科で教科横断的な取組にすることができた。

(3) ビジネスの授業の見える化「ビジネスラーニングカレンダー」(PCDA サイクル・教科横断)

各教科におけるビジネスを起点とした授業は「ビジネスラーニングカレンダー」【資料3】として体系的に整理し、各学年・各教科のビジネス活動の実践状況を可視化した。これにより他教科との共有を図ると共に、学科間の偏りや各教科での実施時期の調整など新たな課題点が出てきた。そのため、ビジネスに関する授業を更に充実させる一つの指標とすることができた。

【資料3：愛知商業高校ビジネスラーニングカレンダー抜粋】

(4) 外部連携活用(人的・物的資源の活用)

2年生の学校設定科目「地域協働ビジネス実践」では、ノベルティアイテムを製造・販売している企業と連携し、情報処理の知識を元にしたデザインビジネスを体験する、ストーリー性を重視したキーホルダーのデザイン作成・製造・販売に授業内容を変更した。

3年生の「ネットワーク活用」では、ネットワークビジネスを体験させるために、衣料品をモール型ECサイトで販売をしている企業と連携し、楽天市場における販売ページ作成及び、販売・集客を体験できる授業内容とした。授業はそれぞれ通年で実施できるようにし、既存の科目を活用したビジネスをより深化させて教えることができるように授業改善を図ることができた。

(5) 16personalities を活用した自己理解・他者理解とチームビルディング

1学期の始めの授業においてチームを作成する際に、16personalities 診断を実施させた。これにより自分の特性や長所を認識させ、クラスメートの性格や考え方の傾向を理解させた。

(6) 心理的安全性を確保するチーム内のルール作り

まず、エドモンドソン教授が定義した4つの対人リスクとして、「無知だと思われる」「無能だと思われる」「邪魔だと思われる」「否定的だと思われる」を4つの不安と定義し、自分が発言できなくなる時に湧き上がる不安はどれかを内省させた。その後、チーム内でその不安を共有し、その不安を解消するためにそれぞれのチーム内で発言をする時や議論をする時にどのようなルールがあれば良いかを考えさせた。チームごとに異なるルールを設定することで、個別最適化された環境が構築されチーム内の心理的安全性を確保することができた。【資料4】

不安を解決し、発言しやすくなるチームの生徒考案ルール（抜粋）
<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔大事 ・他事しない ・拍手&ハイタッチ（見かけたら） ・否定しない ・オーバーリアクション ・全員発言（同じ意見でもいいから） ・ほほえむ笑顔 ・反応する（うなづく、拍手、いいね、少人数でゴソゴソしない、先生フォロー） ・態度を改める（寝ない、アイコンタクト、せかさなない姿勢） ・間違えていい ・一人一つ意見を言う

【資料4：生徒考案チームルール】

5 研究結果の考察と仮説の検証

(1) 仮説1「商業教育は、生徒の学習意欲と学力の向上につながる」の検証

ア ビジネスに関する授業の評価（教科横断）

令和7年5月にビジネスに関するアプローチで数学の授業を受けた生徒26名にアンケート調査を行った所、授業に好意的な意見は69.2%、否定的な意見は7.7%、中立的な意見は23.1%という結果となった。数学と商業を結びつけた授業に対して多くの生徒が「新しい発見があった」「理解が深まった」「面白かった」と肯定的に捉えており、簿記の問題を数学的な手法で解くことで、苦手意識のある教科への理解が進み、学習意欲が向上したという意見が多数であった。

イ 授業アンケートの分析

令和7年6月～7月に実施した授業アンケート（回答数6,368件／内、商業科目1,675件）の、教科別及び商業科を中心に分析した。「授業を受けて、科目に対する興味や関心が高まったと思いますか」という質問に対し、商業科の授業は「そう思う」「やや思う」の項目が88.3%、「授業を受けて、科目の学力や技能が向上したと実感していますか」の質問も同様に、「とても実感している」「実感する場面が多い」の項目が84.6%と他科目に比べて高い数値となった。商業科の授業の好意的な側面として、「実務的な内容や資格取得に直結する」「グループワークや体験型授業が楽しい」「将来に役立つ知識・スキルが得られる」などの点が高評価であった。

ウ 外部連携に関する分析（人的・物的資源の活用）

授業の中で外部連携を実施した生徒（124名）を対象に、アンケートを実施した。まず、「A 外部連携（企業連携）は自身の力を高める上で効果的だと思いますか」、「B この授業で取り組んだ課題に対して、以前に比べてうまく対応できるようになった実感はありましたか？（自己効力感）」、「C この授業をきっかけに、授業外でも関連する内容を調べたり学んだりしたいと思いましたか（学習意欲）」の質問項目に、肯定的回答（「そう思う」「ややそう思う」）をした生徒の割合を算出したところ、外部連携（企業連携）は98.4%と非常に高く、同じく自己効力感が91.1%、学習意欲81.3%と肯定的回答が高い水準で推移しており、外部連携の効果の高さが伺える。【資料5】

設問	肯定的回答割合（「そう思う」、「ややそう思う」）
A 外部連携の効果	98.4% (122/124)
B 自己効力感	91.1% (113/124)
C 学習意欲	81.3% (101/124)

【資料5：外部連携・自己効力感・学習意欲に関するアンケート結果】

(2) 仮説2「心理的安全性の確保は生徒の自己効力感を高め、ウェルビーイング向上に寄与する」の検証
ア 16personalities を活用したチーム作りの評価

授業内で 16personalities を活用してグループを組んだ授業生徒（65名）にアンケートを実施した。「16personalities 診断のチーム作りは自身の力を高める上で良い効果があるか」という問いに対し、肯定的な解答は 87.7%（「そう思う 47.7%」「ややそう思う 40%」）であった。理由としては、多様な意見が出る、協力のしやすさや安心感を高める点において効果的であることが分かった。

イ 心理的安全性を確保するチーム内のルール設定の評価

上記の生徒に「心理的安全性を確保するために作ったチームルールは、自分が発言しやすくなる上で良いと思いますか」という問いに対し、「そう思う」と答えたのは 60.2%、「ややそう思う」と答えたのは 31.7%と、9割以上の生徒が肯定的にとらえた。理由として発言しやすい雰囲気ができる、自身を成長させる、コミュニケーション力や主体性の向上に繋がるといった意見が見られた。

上記のルール設定の根拠となる、生徒が抱える対人リスク別の不安についても調査したところ、「邪魔だと思われたくない」という回答が半数以上を占めた。【資料6】

これは、クラスや授業集団で排除されたくないという心理の表れと考えられる。

無知だと思われたくない	16人	無能だと思われたくない	28人
邪魔だと思われたくない	61人	否定的だと思われたくない	19人

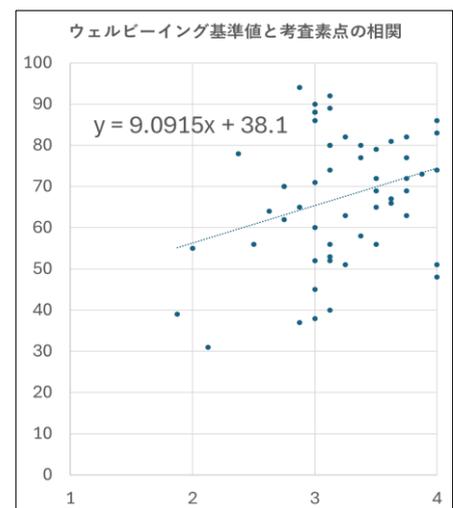
【資料6：生徒が抱える対人リスクの不安 本校生徒抽出 124人】

(3) 仮説3「ウェルビーイングの向上は学力向上を後押しする」の検証

調査を実施しており、心理的安全性を確保するためのルール作りを行った生徒集団（55名）を抽出した。ウェルビーイングに関する質問項目（8項目）を4点満点で評価し、その平均値をウェルビーイングの基準値とし、調査結果の素点を分析することでウェルビーイングと学力の相関関係を図ることにした。相関関係を図る際には、統計的有意性が高いとされているピアソン係数を使用し、上記の2項目の相関を検証した。【資料7】

素点とウェルビーイング基準値のピアソン相関係数は 0.28 であり、弱い正の相関（0.20~0.39）が認められた。

これは、ウェルビーイングが高い生徒ほど学力も高い傾向があることを示している。有意確率を図る P 値（ $P < 0.05$ であれば統計的に有意）は 0.04 だったことから、本相関は偶然の可能性は低く、統計的にも有意であると言える。



【資料7：ウェルビーイング基準値と調査素点の相関】

6 研究成果

本研究では、カリキュラム・マネジメントの手法を活用し、教科横断的な授業設計により商業科目と普通科目を融合した学びを展開した。数学科では管理会計を題材にした授業を通じて、生徒の理解と学習意欲が向上し、アンケートでも肯定的な評価が多数を占めた。

企業との連携による実践的な学びでは、実社会との接点が生徒の意欲と学力向上に寄与した。さらに、16personalities 診断を活用したチーム編成と心理的安全性を高めるルール作りにより、生徒間の相互理解が促進され、安心して発言できる環境が整った。これらの取組は、多様な意見交換を促す有効な手法として評価された。ウェルビーイングと学力の相関では、弱い正の相関が認められ、心理的安全性を意識した学習環境がウェルビーイングを高め、学力向上にもつながる可能性が示された。

7 今後の課題

本研究は、商業高校の教育活動にウェルビーイングの視点を取り入れることで学力向上に寄与する可能性を示したが、今後の研究では、「ウェルビーイングの定義と測定方法の精緻化」や「心理的安全性の施策の継続性と汎用性の検証」が課題である。ウェルビーイングと学力の因果関係の解明にはさらなる検証が必要であり、今後は直接的な影響を明らかにする研究が求められる。

・P3 4(5) 16personalities 診断結果 本研究における抽出者 124 名 タイプ別生徒人数

分析家	建築家	4人	論理学者	6人	指揮官	3人	討論者	2人
外交官	提唱者	8人	仲介者	13人	主人公	7人	運動家	27人
番人	ロジスティック	3人	擁護者	4人	幹部	2人	領事	2人
探検家	巨匠	4人	冒険家	16人	起業家	1人	エンターテイナー	22人

P3 5(1)ア ビジネスを題材とした数学の授業アンケート抜粋(令和7年5月実施)(回答数 26 件)
 質問「今回の授業は数学Ⅱの授業で管理会計の内容を行いました。このように普通科目で商業科目の題材を扱うことに対してどう思いますか」に対する回答。

【メリット】

商業で数学の考え方をすることで解くのが早くなることもあると思うためいいと思います
どちらのほうが自分に合っているのか確かめることができるのでいいと思った。商業的な手法も数学的な手法もそれぞれに解く楽しさがある。
商業的な考え方以外の解き方の方が解きやすいときもあると思うので、良いと思います。
商業の学びが深まるいろいろな考え方ができるからいい
商業の問題でも数学で解けることができるのが面白い
さまざまな解き方ができて新しい考え方が生まれるので良い
商業の学びが深まるので、定期的にやってほしい。
いつもより授業に集中して、楽しんで取り組んでいる人が多くいた。数学への苦手意識がある人も簿記と絡めることで、積極的に授業に参加ができると思う。
商業で学んだことについて、学びを深めることができ良い。商業と数学どちらの方法も学ぶことで、片方が苦手だった場合の助けになるため
普通科目の内容を商業科目に生かせるので良い

【デメリット】

普通科目と商業科目を合わせるにより授業の効率化を図ることができましたが、商業の知識と普通科目の知識が混在してしまい混乱してしまったため、あまり合わせないようにした方がよいと思いました。
頭のとらえ方が良くないと混合してしまう
商業と一緒に勉強すると混ざってしまい余計分からなくなってしまう。だからこそ商業は商業、数学は数学で行いたかったです。
商業の問題なので商業的な解き方で解きたい。せめて商業的な解き方も一緒に解説して欲しい。